

【資料論文】

大学生の学習動機に関する研究

國 吉 和 子

キーワード：学習動機、向上心、交友関係志向、学歴志向

【目的】

我々が学習する際の学習の動機や目標には、学ぶこと自体が楽しいからとか、より多くのことを知りたいから等のような内発的なものから、教師や親から賞賛を得たいからとか、友人に負けたくないから等のような外発的なものまでさまざまな種類が含まれる。そして、その動機・目標の種類や内容によってその後の学習の態度や内容、速度、深化度等への影響の仕方が異なってくる。

学習動機に関する研究としては、主として内発的動機づけの観点から桜井・高野（1985）、桜井（1989, 1990, 1991）等の研究がある。また、達成動機づけの側面から、Dweck（1986）、Elliot & Dweck（1988）、樋口（1985）、市川（1995）等によって研究がなされている。その多くは児童を対象とした研究である。

本研究においては、大学生を対象とした桜井の研究（1991）の報告に基づいて、大学生の学習動機に関する質問項目を作成し、大学生の学習動機の構造および下位尺度を明らかにすることが第一の目的である。そして、國吉（2004）の研究において、自己の学習意欲への満足感や座席行動等と講義へのコミットメントや成績等との間に正の相関が見られたことから、学習意欲の認知や学習意欲満足度、座席行動等が学習動機の下位尺度とどのように関連しているか、また、学習集中度、学習の計画性、自尊心等の要因も加えて、それらの要因と学習動機の下位尺度との関連性を検討することが第二の目的である。さらに、数量化Ⅲ類による解析により、大学生の学習動機パターンを探ることが第三の目的である。

【方法】

調査対象者：沖縄県内の大学生436名（男 222名、女 214名）

質問紙の構成：本研究で用いられた質問紙には以下の質問項目が含まれている。

1) 大学で学ぶ動機について28項目。「かなりあてはまる」「ある程度あてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法（4～1）で回答を求めた。この28項目の作成にあたっては、桜井（1991）の「大学で学ぶ動機・理由」の質問項目に基づき、また、筆者の心理学関係科目受講生50名を対象にして「大学で学ぶ動機」について自由記述式で得た回答結果も合わせて43質問項目を作成した。予備調査をして因子分析による検討をした結果、最終的には、学習動機を測定する尺度として28項目を選定した（その簡略版は表1を参照）。

2) 学習動機との関連性をみるための質問項目として下記の項目を加えた。

- a. 自己の学習意欲に関する項目が2問。自己の学習意欲の認知と学習意欲満足度を問う項目で「かなり高い（満足）～「殆どない（満足しない）」の4件法（4～1）で回答を求めた。

- b. 受講時の座席行動に関する項目が2問。受講時の座席選択基準として、①集中できる席、②リラックスできる席、③私語や居眠り等ができる席の選択肢から回答(3～1)。受講時の座席選択については「前席に坐ることが多い」に対して「よくあてはまる～全くあてはまらない」の4件法(4～1)で回答を求めた。
- c. 学習への集中時間に関する項目が2問。1つのことをするのに集中できる時間として①30分以内、②30～1時間以内、③1～2時間、④2時間以上の選択肢から回答を求めた(1～4)。また、90分の講義における集中できる時間を記述式で回答を求めた。
- d. 受講態度に関する項目が2問。「受講中私語を多くする」「携帯電話使用が多い」などの項目に対して「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法(4～1)で回答を求めた。
- e. 自尊心尺度10項目(Rosenbergの自尊感情尺度、1965;山本らによる邦訳、1982)。回答方法は「かなりあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法(4～1)であった。
- f. 学習の計画性に関する項目が7問。「計画を立てて生活する」「レポートを課された時にすぐに取りかかる」「いつまでに何をするか常に考えている」「その日の中にすべきことを延ばすことがある」(逆転項目)等の項目に対して「よくあてはまる」～「全くあてはまらない」の4件法(4～1)で回答を求めた。

3) デモグラフィック要因として、年次、性などが含まれている。

調査実施時期：2006年10月～11月に行なった。

手続き：沖縄県内の3大学で心理学関係科目の授業の時に一斉に質問紙を配布して回答を求めた
所要時間は20～30分であった。

[結果と考察]

1. 学習動機の因子分析結果

学習動機測定項目28項目全体を因子分析にかけた。因子抽出法として用いた手法は主成分分解で、6因子が抽出され、それにバリマックス回転を施した。結果は、表1に示されている。因子負荷量が400以上の項目を下位尺度項目として選択した。

第1因子は、「自分の可能性を試してみたいから」「大学で勉強して自分を高めたいから」「大学で本当の自分を見極めたいから」「自分の視野を広げたいから」「自分が本当にしたいことを探したいから」などの項目が高い負荷量を示していることから、「向上心」因子と命名した。

第2因子は、「異性の友だちとつきあえると思うから」「楽しい大学生活を経験したいから」「大学で一生活きあえる友だちをつくりたいから」「大学に入って十分に遊びたいから」などの項目が高い負荷量を示していることから、「交友関係志向」因子と命名した。

第3因子は、「学歴がある方が社会に出てから得なことが多いと思うから」「学歴がないといい仕事に就けないと思うから」「大学卒の学歴がほしいから」などの項目が高い負荷量を示していることから、「学歴志向」因子と命名した。

第4因子は、「資格を取りたいから」「大学で専門的なことを学びたいから」「大学でもう少し教養を身につけたいから」「将来自分の希望する職業に就きたいから」などの項目が高い負荷量を示していることから、「資格取得志向」因子と命名した。

第5因子は、「大学に進学しないと親や先生に悪いような気がして」「親や先生に大学に進学するようにといわれて」「友だちや周りの多くの人たちが進学するので」などの項目が高い負荷量を示していることから、「外発性動機」因子と命名した。

第6因子は、「高校卒業してからすぐに就職する気になれなかったから」「まだ社会に出る自信がないから」「特にやりたいことがなかったから」「まだしばらく学生をやっていたいから」などの項目が高い負荷量を示していることから、「ニート志向」因子と命名した。

表1 学習動機の因子分析結果（回転後）

項目	因子	I	II	III	IV	V	VI
1. 自分の可能性を試したい		.743	.120	.162	.065	-.018	-.003
2. 自分をより高めたい		.697	-.032	.077	.358	-.108	-.034
3. 本当の自分を見極めたい		.687	.061	.238	.013	.029	-.132
4. 自分の視野を広げたい		.683	.098	-.106	.154	-.161	-.009
5. したいことを探したい		.604	.163	.078	-.229	.064	.377
6. 新しいことを知りたい		.597	.094	-.258	.295	.039	-.080
7. 自分の将来を考えたい		.592	.270	.059	-.053	.036	.227
8. 立派な人間になりたい		.445	.194	.415	.212	.129	-.201
9. 学ぶことが将来役立つ		.424	.151	.255	.357	.004	-.285
10. 異性の友だちと遊びたい		.072	.768	.087	.026	.127	.135
11. 楽しい大学生活を経験したい		.250	.761	.166	-.060	.029	.129
12. 友だちをつくりたい		.224	.733	.122	.104	.099	-.115
13. 大学で十分に遊びたい		-.052	.723	.111	-.152	.041	.269
14. 色々な人と知り合いたい		.459	.570	-.104	.164	.127	-.019
15. 学歴がある方が得だから		.111	.118	.804	.003	.155	.157
16. いい仕事をみつけるため		.067	.104	.795	.025	.194	.149
17. 大学卒の学歴がほしい		.011	.156	.652	.072	.147	.283
18. 資格を取りたい		-.013	.023	.131	.699	.010	.037
19. 専門的な勉強をしたい		.167	-.074	-.151	.675	-.181	-.166
20. 教養を身につけたい		.410	-.096	-.056	.574	-.070	.137
21. 将来希望する職業に就きたい		.159	.164	.261	.542	-.070	-.261
22. 進学しないと親に悪いから		-.070	.075	.175	-.041	.793	.058
23. 親に進学を進められて		.030	.137	.097	-.109	.776	.165
24. 周りの人が進学するので		-.031	.105	.172	-.065	.749	.190
25. 就職する気にならない		-.040	.135	.156	-.079	.126	.736
26. 社会にでる自信がない		.077	.161	.294	.007	.254	.613
27. 特にやりたいことがない		-.052	.075	.096	-.412	.409	.537
28. 学生をやっていたい		.043	.496	.230	.028	.148	.509
固有値		4.01	3.17	2.53	2.31	2.30	2.24
寄与率(%)		14.34	11.33	9.07	8.23	8.20	7.98

2. 学習動機と学習意欲、学習集中度、座席選択、計画性、自尊心等との関連性

学習動機の6因子をそれぞれ基準変数とし、大学生の学習意欲（認知と満足度）、学習集中度（1つのことをするための集中度、90分授業への集中度）、座席行動（受講時の座席選択、座席選択基準）、学習の計画性、自尊心得点などを説明変数とする重回帰分析を行なった。解析はステップワイズ法による。解析の結果は表2のとおりである。どの因子においても、重相関係数は.40未満であり高くはないが、学習意欲満足度と集中時間（1つのこと）を除く他の8つの要因が学習動機に影響を及ぼしていることが示されている。

第1因子の「向上心」においては、学習意欲の認知が正の影響を与えており、学習意欲が高いと認知している者ほど「向上心」が強いことを示している。

第2因子の「交友関係志向」においては、受講中の私語頻度やケータイ使用頻度、自尊心等が正の影響を及ぼすという結果を示している。また、学年や座席選択（前・後）等は負の方向に影響している。講義中に私語やケータイ使用が多い者、自尊心が高い者ほど、「交友関係志向」が強い。一方、学年が上がるほど、また、受講時に前席選択が多い者ほど、「交友関係志向」は弱いことを示している。

第3因子の「学歴志向」においては、学年のみが関連しており、負の影響を与えている。学年が上がるにつれて「学歴志向」は弱くなる。卒業が近づくと、学歴を志向する必要性はなくなるということであろう。

第4因子の「資格取得志向」においては、学習意欲の認知と集中時間が正の影響を与えている。学習意欲が高いと認知している者、集中時間（90分講義への集中度）が長い者は「資格取得志向」が強いことを示している。

第5因子においては、「外発性動機」においては学年が正、自尊心が負の影響を与えている。「外発性動機」は学年が上がるにつれて強くなり、自尊心の高い者ほど弱いという結果を示している。

第6因子の「ニート志向」においては、学年が正、集中時間や座席選択基準、自尊心などが負の影響を与えている。学年が上がるにしたがって「ニート志向」が高くなり、一方、受講時の集中時間が長い者、集中できる席を選択する傾向が強い者、自尊心が高い者などは「ニート志向」が低くなることが示されている。

表2 重回帰分析の結果

説明変数	因子	I	II	III	IV	V	VI
学習意欲の認知		.23***			.11*		
学習意欲満足度							
集中時間(90分講義)					.15**		-.16**
集中時間(1つのこと)							
学年			-.10*	-.13**		.12*	.15**
座席選択基準							-.14**
前席選択			-.10*				
受講中私語			.17**				
受講中ケータイ使用			.16**				
自尊心			.14**			-.14**	-.10*
重相関係数		.23***	.33***	.13**	.22***	.17**	.31***
		***P<.001	**P<.01	*P<.05			

3. 数量化Ⅲ類による大学生の学習動機のパターン分類

学習動機28項目に対する4件法による回答結果を肯定(あてはまる:Yと記す)と否定(あてはまらない:Nと記す)の2つにまとめ、各回答が偏らないもの13項目(26カテゴリー)(各項目のYとNの各回答率が25%以上のもの)を選んで、それに数量化Ⅲ類を適用した。その結果、第Ⅰ軸、第Ⅱ軸、第Ⅲ軸のそれぞれの固有値は、.20, .17, .10であった。相関係数はそれぞれ.46, .41, .31であった。

第1軸は、正の方向に、「友だちや周りの多くが進学するから:Y」「親戚や先生に大学進学をすすめられたから:Y」「特にやりたいことがないから:Y」等が、負の方向に、「学歴がある方が得だから:N」「まだ社会にできる自信がないから:N」「楽しい大学生活をしたいから:N」等が分布しているため、<モラトリアム志向(高一低)>の軸と判断された。

第2軸は、正の方向に、「大学で本当の自分を見極めたいから:Y」「自分の可能性を試してみたから:Y」「大学で勉強して自分を高めたいから:Y」、負の方向に、「大学で勉強して自分を高めたいから:N」「将来自分の希望する職業に就きたいから:N」「自分の可能性を試してみたいから:N」などが分布しているため、<自己向上志向(高一低)>の軸と判断された。

第3軸は、正の方向に、「楽しい大学生活をしたいから:N」「大学に入って遊びたいから:N」「学歴がないといい仕事が見つからないから:Y」等が、負の方向に、「大学に入って遊びたいから:Y」「楽しい大学生活をしたいから:Y」「学歴があると得だから:N」「資格をとりたいたから:N」等が分布しているため、<学歴・資格取得志向(高一低)>の軸と判断された。

図1~図3は、学習意欲(自己認知、満足度)、集中時間(1つのことをするための集中時間)、座席行動(受講時の座席選択、座席選択基準)、学習の計画性、自尊心得点等の尺度値、学年別、性別などのデモグラフィック要因を含むそれぞれの尺度の各サンプル・スコアを算出し、軸毎にプロットしたものである。そして、各変数のサンプル・スコアの分散分析結果(統計的に有意差が認められたもののみ)は表3に示されている。

第1軸の「モラトリアム志向(高一低)」においては、集中時間(F(2)=3.30, P<.05)、自尊心(F(2)=4.36, P<.05)、座席選択(F(1)=5.91, P<.05)等では統計的に有意差が認められた。座席選択基準(F(2)=2.65, P<.10)では有意な傾向差がみられた。

表3 各軸における各変数の分散分析結果

変数	1軸	2軸	3軸
学年間	n.s.	+	n.s.
性別	n.s.	**	n.s.
集中時間(1つのこと)	*	**	n.s.
自尊心	*	n.s.	n.s.
座席選択	*	**	n.s.
座席選択基準	+	***	n.s.
学習意欲満足度	n.s.	**	n.s.
計画性	n.s.	***	+

* P<.05 ** P<.01 *** P<.001 † P<.10

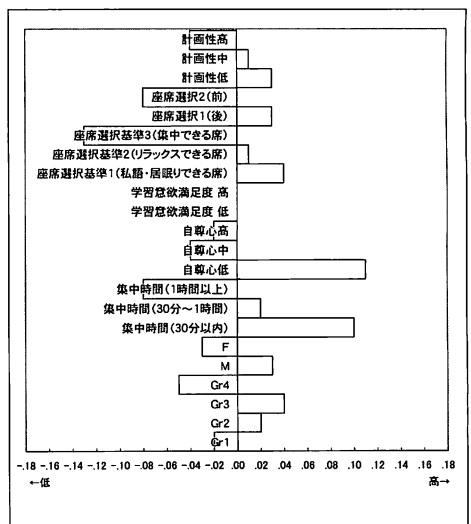


図1 1軸 モラトリアム志向

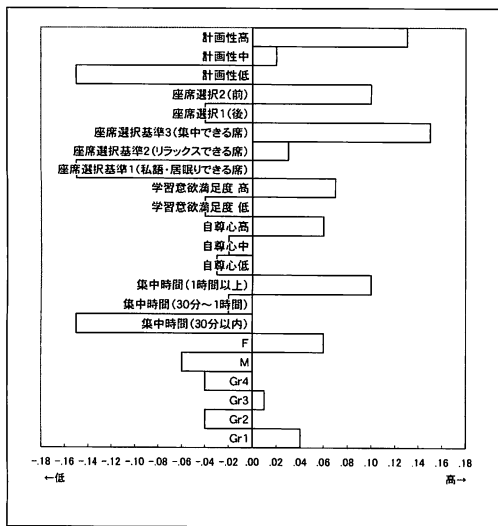


図2 2軸 自己向上志向

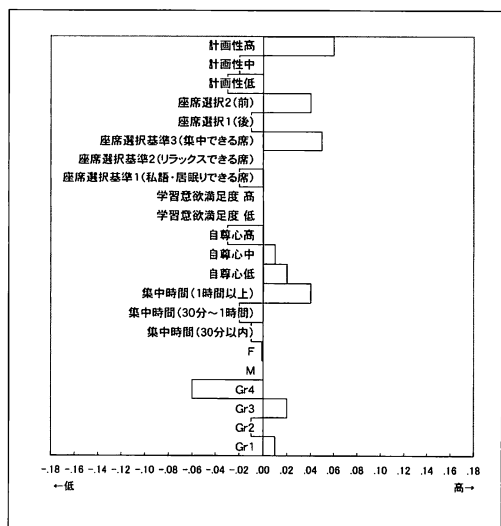


図3 3軸 学歴・資格取得志向

第2軸の「自己向上志向（高－低）」においては、性別（ $F(1)=8.65$, $P<.01$ ）、集中時間（ $F(2)=7.58$, $P<.01$ ）、学習意欲満足度（ $F(1)=7.40$, $P<.01$ ）、座席選択基準（ $F(2)=10.62$, $P<.001$ ）、座席選択（ $F(1)=9.50$, $P<.01$ ）、計画性（ $F(2)=14.16$, $P<.001$ ）等で有意差が認められた。

第3軸の「学歴・資格取得志向（高－低）」においては、計画性（ $F(2)=2.78$, $P<.10$ ）において傾向差がみられた。

これら3つの軸の中、第1軸と第2軸の構造図を示すと図4のとおりである。この2つを組み合わせると大学生の学習動機パターンをみると①モラトリアム志向が高く、自己向上志向も高い（第1象限）、②モラトリアム志向が高く、自己向上志向は低い（第2象限）、③モラトリアム志向が低く、自己向上志向も低い（第3象限）、④モラトリアム志向が低く、自己向上志向は高い（第4象限）、の4タイプに分類できる。そのなかに、前述の各尺度のサンプル・スコアをプロットしたのが図5である。

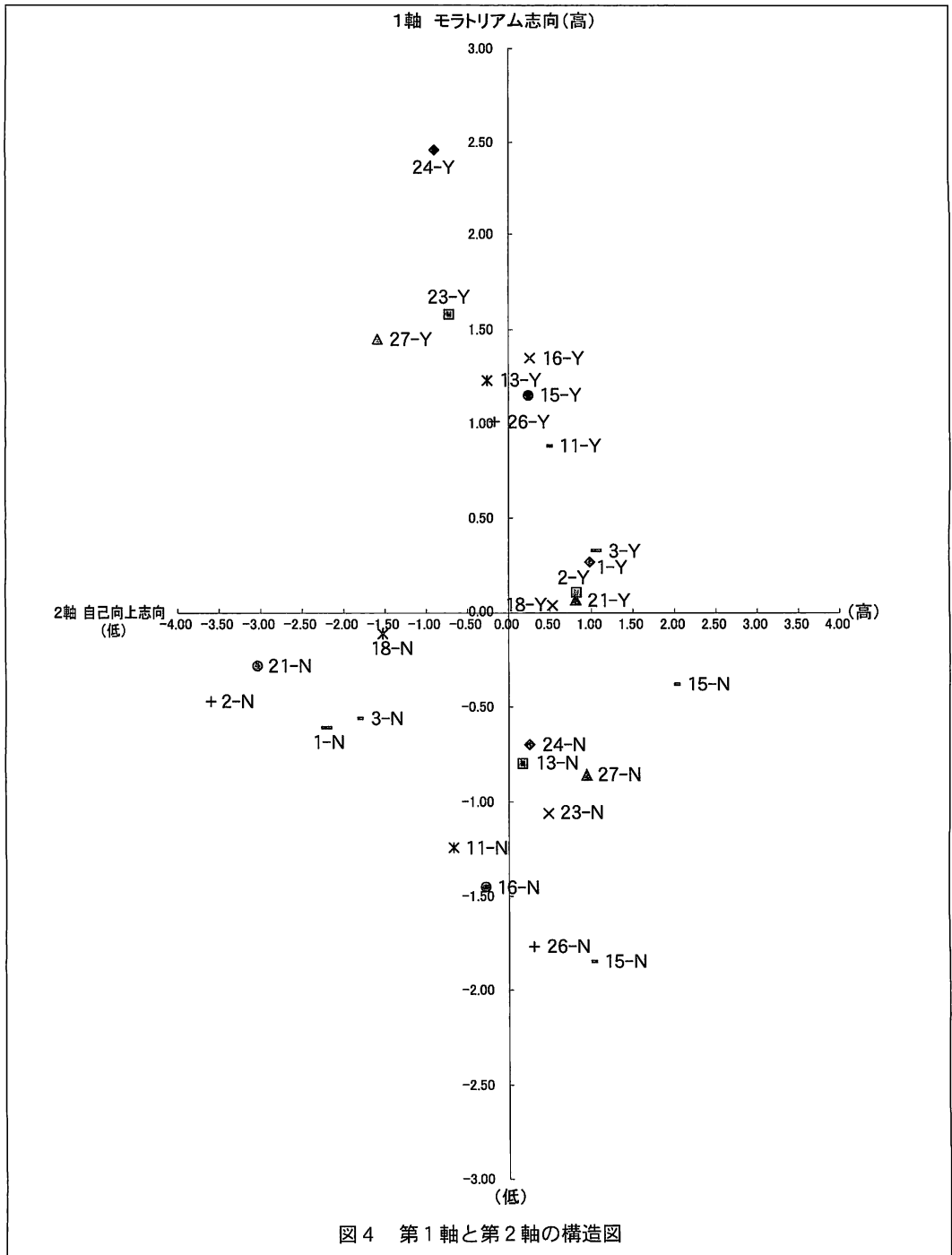
モラトリアム志向が高く、自己向上志向が高い第1象限には、計画性中程度、座席選択基準2（リラックスできる席）を選択、Gr3（3年次）などが位置している。

モラトリアム志向が高く、自己向上志向が低い第2象限には、集中時1（1つのことをするのに集中できるのは30分以内）、座席基準1（私語や携帯電話使用、いねむりができる席）、座席後ろ（後席で受講）、自尊心低、計画性低、男性、Gr2（2年次）などが位置している。

モラトリアム志向が低く、自己向上志向も低い第3象限には、自尊心中、Gr4（4年次）等が位置している。

モラトリアム志向が低く、自己向上志向が高い第4象限には、計画性高、座席選択基準3（緊張しても集中できる席）を選択、集中時間3（1つのことをするのに集中できるのが1時間以上）、座席前（前席で受講）、女性、Gr1（1年次）などが位置している。

総じて、計画性が高い者や受講するとき前方の席に坐る者、緊張しても集中できる席を選択する者、集中時間が長い者、自尊心の高い者はモラトリアム志向が低く、自己向上志向が高いタイプに



(注)図内の各番号は、表1の各項目の番号と対応する。それぞれについて「あてはまる」の回答をY、「あてはまらない」の回答をNとした。

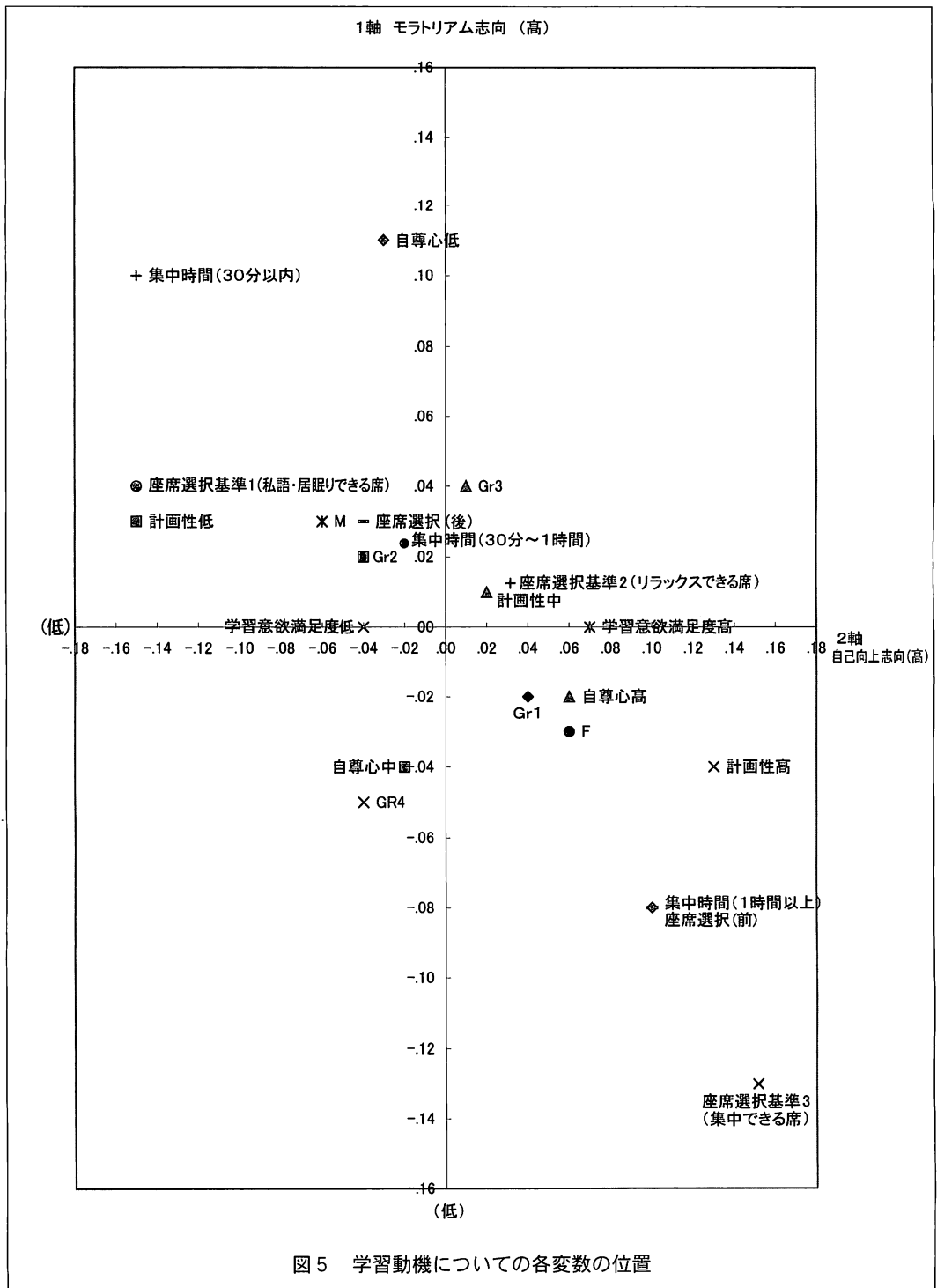
分類される。他方、計画性が低い者、集中力のない者、受講するとき私語や携帯電話使用、居眠り等ができる席を選ぶ者、計画性が低い者、自尊心の低い者などはモラトリアム志向が高く、自己向上志向が低いタイプに分類される。

性別比較をすると、相対的に、女性は前者のタイプ、男性は後者のタイプに含まれる。年次別比較においては、1年次は新しい大学生活へ適応するために期待と緊張が高まるためか、モラトリアム志向が低く、自己向上志向が高い第4象限に位置している。しかし、2年次になると、大学生活への慣れと緊張の緩みが出てくるためか、モラトリアム志向が高く、自己向上志向が低い第2象限の方へシフトしている。そして、大学生活が後半を迎える3年次になると、モラトリアム志向が高く、自己向上志向が高い第1象限に、4年次には、卒業を目前にしてモラトリアム志向は低くなり、自己向上志向も低い第3象限にシフトする傾向を見せている。

[まとめ]

本研究においては、大学生436名を対象として、大学生の学習動機に関する調査を実施し、学習動機の下位尺度の構造を明らかにした。そして、学習意欲や学習集中度、座席行動、学習の計画性、自尊心等の学習動機に及ぼす影響について検討がなされた。学年や性などのデモグラフィック要因の効果についても検討がなされた。さらに、学習動機項目の中から妥当と思われる項目数・カテゴリ数を選択して、数量化Ⅲ類を適用し、学習動機のパターン分類を試みた。本研究で分析された結果から主に以下のことが明らかにされた。

- ①学習動機についての因子分析の結果、「向上心」「交友関係志向」「学歴志向」「資格取得志向」「外発性動機」「ニート志向」などの6因子が抽出された。
- ②学習動機と学習意欲（認知、満足度）、学習集中度（1つのことへの集中度、授業への集中度）、座席行動（受講時の座席選択、座席選択基準）、学習の計画性、自尊心、学年などとの関連性の分析の結果、「向上心」因子では学習意欲の認知がプラスに関連していた。「交友関係志向」因子では、受講態度や自尊心がプラス、学年や座席選択などはマイナスに関連していた。「学歴志向」因子では、学年のみがマイナスに関連していた。「資格取得志向」因子では、学習意欲に認知と集中時間がプラスに関連していた。「外発性動機」因子では、学年がプラス、自尊心がマイナスに関連していた。「ニート志向」因子では、学年がプラスに、集中時間や座席選択基準、自尊心などはマイナスに関連していた。
- ③学習動機項目の一部を数量化Ⅲ類によるパターン分類した結果、第1軸の「モラトリアム志向（高一低）」、第2軸の「自己向上志向（高一低）」が析出された。
- ④大学生の学習動機パターンとして、「モラトリアム志向が高く、自己向上志向も高い（第1象限）」タイプ、「モラトリアム志向が高く、自己向上志向が低い（第2象限）」タイプ、「モラトリアム志向が低く、自己向上志向も低い（第3象限）」タイプ、「モラトリアム志向が低く、自己向上志向も低い（第4象限）」の4タイプに分類された。
- ⑤第1象限には計画性中程度、リラックスできる座席選択者（基準2）、3年次生などが位置している。第2象限には、集中時間が30分以内の者、私語や居眠りができる座席選択者、後席での受講者、自尊心低の者、計画性低の者、男性などが位置している。第3象限には、自尊心中程度の者、4年次生などが位置している。第4象限には、計画性高の者、集中できる席の選択者、1つのことへの1時間以上の集中者、前席での受講者、女性、自尊心高の者、1年次生等が位置している。



引用文献

- Elliot, E. S. & Dweck, C. S. 1988 Goals: An approach to motivation and achievement. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 33-42.
- Dweck, C. S. 1986 Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-1048
- 樋口一辰 1985 児童の学習動機と学業達成場面での原因帰属様式 学習院大学文学部研究年報、32, 253-272
- 市川伸一 1995 学習動機の構造と学習観との関連 日本教育心理学会第37回総会発表論文集、177
- 國吉和子 2004 大学生の座席行動と学習態度に関する研究 沖縄大学地域研究所年報、第18号、129-137
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self image*. Princeton Univ. Press.
- 桜井茂男・高野清純 1985 内発的・外発的動機づけ測定尺度の開発 筑波大学心理学研究, 7, 43-54
- 桜井茂男 1989 小学生における学習動機の測定 奈良教育大学紀要、38, 207-213
- 桜井茂男 1990 小学生における学習動機と動機づけ傾向の関係 日本心理学会第54回大会発表論文集、736
- 桜井茂男 1991 教育学部の学生が大学で学ぶ動機・理由と社会的不適応の関係 奈良教育大学教育研究所紀要、27, 123-130
- 山本真理子・松井豊・山城由紀子 1982 自尊感情尺度 (Self-Esteem Scale) 堀洋道・山本真理子・松井豊編 1994 心理尺度ファイル 垣内出版 67-69